

ヤズド・カーグイエ家とモンゴル人

北 川 誠

ヤズド地方は、イラン中央部、キャヴィール砂漠とザグロス山地が接する乾燥した高原にあり、東北は砂漠を経てゴヘスタン *Gohestān* のタバス *Tābas*、南西方向には海拔四、〇七五メートルのシルクーフ *Shirkūh* 山を経て、ファールス地方のアーバーデ *Ābada* に至る。北西はイスファハーン地方、南東はケルマーン地方と接し、三者を結ぶ経路は、所謂イラン南道の一部である。今日のヤズド準州 (*farmandāri-koll*) は、ヤズド、バーフェグ *Bāfeg*、タフト *Taft*、アルダカーン *Ardekān* の四シャフリスタンに区分される。これらは歴史地理上のヤズド地方を構成するが、時代によっては、イスファハーン州のナリーン *Nārīn* 地方もヤズドの属地に含められた。ここは、イランでも最も乾燥した地域であり、主要都市と村落は、概ね、海拔一、〇〇〇メートル以上の高地に分布する。面積は五六、八九六平方キロメートル、人口は二八一、一五八人 (一九六六年センサス)、一一九個の村落 (*qariyeh*) が散在する (一九一〇年)。自然的条件は厳しいが、インドと地中海を結ぶ陸路の要衝にあり、また絹の生産地として、近世に至るまで活気があった。⁽¹⁾

ササーン朝とイスラーム時代初期には、ファールス州の一地方であったヤズドは、モンゴル人支配下には、イラク・アジャミー州に編入されて、ヤズド県 (*tūmān*) となり、その内部はヤズド、メイボット *Maibod* 等三郡 (*shahr*) に細分されていた。⁽²⁾

モンゴル人来寇時ヤズドを支配していたのはダイレム人ムハンマド・アブージャアファル・ビン・ドシユマンズィヤール・フサームディーン・アラールウッダウラ Muḥ. Abū Ja'far b. Doshmanziyār Ḥusām al-Dīn 'Alā' al-Daula の子孫であるカークイーユ Kākūyā 家であったが、男系の子孫が絶え、ロクヌッディーン・サーム・ビン・ヴァルダールズ Rukn al-Dīn Sām b. Yardanūz が、アミール・フアラールマルズ・アラールウッダウラ anīr Farāmāz 'Alā' al-Daula の二人の娘のアタベクとしてヤズドの支配権を得た。⁽³⁾以後彼の子孫がアタベクの称号と支配権を継承し、通例ヤズドのアタベク家として知られている。同家は、ジャラールディーン・ホラズムシャーの死後（一二三一年）、モンゴル人の支配下に入り、イル・ハーン国末期まで同地方を統治したが、やがて、家臣でメイボッド地方の領主であったムザッファル家に統治権を奪われた。ムザッファル家は南イラン全体を領有するイラン民族王朝に成長する。小論ではイル・ハーン国下の土着地方政権の動向を説明する一環として、ヤズド・アタベク政権とモンゴル人との関係について述べるものである。

カークイーユ朝自身のためには個々の史書は書かれていないが、メイボッドの領主として出発し、次第に主家をして、南イランに把を称えるに至ったムザッファル朝には、ムイースル・ヤズディー Mu'īn al-Yazdī（一三八七年没）が一三六五に執筆した『神の贈物 Mawāhib-i-īlahī』⁽⁴⁾と、マフムード・クトビー Mahmūd Kutbī が一四二〇年に著した、ヤズディーの史書の要約、及び一三六五年以降の部分の補足である『ムザッファル朝史 Tarikh-i-āl-i-Muzaffar』⁽⁵⁾があつてヤズド地方におけるムザッファル朝の興隆とカークイーユ家衰退の事情を知ることができる。

また一五世紀には、ヤズド自体で二編の地方誌が執筆された。最古のものは、ジアフアル・ビン・ムハンマド Ja'far b. Muḥammad が、同世紀前半に著した『ヤズド史 Tarikh-i-Yazd』⁽⁶⁾であり、もう一つは、アフマド・ビン・フサイン・カーティブ Ahmad b. Husain Katib が一四五七年ごろ著した『ヤズド史 Tarikh-i-Yazd』通称『ヤズ

ド新史 *Tarikh-i Jadid-i Yazd*⁽⁷⁾である。これらによつて、カーキーイエ家のアタベク達の治績を知ることができる。次に、イル・ハーンの宮廷で記されたペルシヤ語年代記『世界征服者の歴史』⁽⁸⁾、『集史』⁽⁹⁾、『ワッサーフ史』⁽¹⁰⁾、『選史』⁽¹¹⁾等にも断片的ではあるが、イラン全体の情勢をふまえた信頼できる記事があり、地方史の記事と比較することにより、一層全体的な情報を得ることができる。

一、ヤズドの対モンゴル服属

初代のアタベク、ロクヌッディーンの死後（五八四＝一一八八／九年）、アタベクの地位は弟イッズッディーン・ランギヤル *ʿIzz al-Din Langar* にうけつがれ、その死後（六〇四＝一二〇七／八年）は、イッズッディーンの子ヴァルダンルーズが六一六＝一二一九／二〇年までこの地位にあった。『ヤズド史』は、ヴァルダンルーズの次に、彼の息子クトゥブッディーン・イスファフサル *Qutb al-Din Isfahsālār* が六二六（一二二八／九）年までヤズドを統治したとし、ソトゥード博士もこれに従っているが（*Sotuda*, II, 11）、ナサヴィーの『ジャラールッディーン・マクビルニー伝』⁽¹²⁾（*Minovi*, p.127）には、六二二＝一二二四／五年）スルターン・ジャラールッディーン・ホラズムシャーがデリー・スルタン領から南イランに進出するに及んで、

ヤズド国主（*sāhib-i Yazd*）アタベク・アラウッダウラは、彼の御前に参伺し、忝順の意を示し、先例に慣つて、現金と従者をもたらし、ジャラールッディーンの住いがこれらに潤沢であるようにしたので、彼にアター・ハーン *Atā Khān* の称号を与え、現に彼が持っていた国（*balad*）の安堵を約束した。

従つてこの時、初代アタベク、ロクヌッディーン・サームの息子、名（イスマ）は不明であるがアラウッダウラ・アター・ハーンがヤズドのアタベクであつたのである。彼は、六二四＝一二二六／七年モンゴル軍がイスファハーン

を攻撃した際、

ヤズド国主アラウッダウラは、捕虜になった。彼は一人の背教者によってとらえられた。彼は有り金全部を与え、その者は彼を解放した。しかし、彼は夜間井戸に落ちて死亡した。(Bynarov, ctp. 184)

『ヤズド史』(Jafari, p. 24) に、

彼(ロクヌッディーン)には、グルシャースブの娘の生んだ一子があり、アラウッディーン・アター・ハーンと呼ばれていた。彼はスルターン・ムハンマド・ホラズムシャーのもとに仕え、ジュルマーグーンとの戦いで死亡した。彼は、信仰の英雄(*shāhāda-i bahādur-i ghāzi*)であった。アター・ハーンの死は、六二四年ラマザーン月七日(一二二七年八月二三日)であった。

とある。グルシャースブとは、カークイエ家本流最後のヤズドの支配者アラウッダウラである。ソトゥーデ博士は、アター・ハーンをヤズドのアタベク存位表において、数えないが、確実なところでは、六二一—二四年間、恐らくは六一六—六二四年間を、アター・ハーンの治世としなくてはならない。また、従って、クトゥブッディーンの治世は六二四—六二六年間のことになるが、彼が、イスファフサーラールと呼ばれていた事実(Jafari, s. 24)、彼がアター・ハーンのもとで侍大将(*ispahsālār*)であったであろうことを考えさせる。

クトゥブッディーンの即位について、ジャファリーの『ヤズド史』(Jafari, 24)には次のようにある。

彼(ヴァルダンルーズ)の後、ヤズドの統治権 *sulṭanat* は、イスファフサーラール・アブーマンスールに達した。彼はスルターン・クトゥブッディーンとして知られている。

ジャアファリーは、クトゥブッディーンがスルターンの称号を用いたと述べているが、この称号はヤズド市中の碑文にも見えたのだから、ジャアファリーによる後代の個人的諡号ではなく、クトゥブッディーン自分が当時このよう

に称したのであると推測できる。勿論これは、ホラズム帝国、特にイスファハーン地方を領有していたスルターン・ギヤースッディーンからの独立を意味するので、六二五（一二二七／八）年にギヤースッディーンがケルマーン地方で、この地方の支配者バラーク・ハージエブ Barāq Hājeb に殺害された時より後であろう。このバラークはカリフのもとに使者を送り、スルターンの称号を与えられていることから推測して、クトゥブッディーンもこのころからカリフから称号を与えられたのであろう。

このころ、クトゥブッディーンとバラークの間に武力衝突の危機が生じた。クトゥブッディーンは、イスファハーンに兵を出し、ギヤースッディーン・ホラズムシャーがそこに残した財産と美姫ケルケン・ハトゥン Terkān khātūn を押収したが、バラークはこの行為を自分の権利に対する侵害と考えたからである。しかし、交渉の結果、バラークはテルケン・ハトゥンを娶り、クトゥブッディーンは自分の息マフムード・シャーのためにバラークの娘、サファヴァットッディーン・アーダム・ヤークト・テルケン Safavat al-Dīn Ādam Yākut Terkān を娶ることで、双方は兵を撤回した。ところが、ケルマーン側の史料によれば、クトゥブッディーンのイスファハーン出兵をバラークに通報したのは、他ならぬアーダムヤークト・テルケンであったという⁹⁵。従ってアーダム・ヤークトとマフムードシャーの結婚は、ギヤースッディーンの遺産処理とは無関係に、この事件以前に行われたのである。

バラークは別の娘マリヤム・テルケンを、クトゥブッディーンの兄弟ムフィーウッディーン・サーム Muḥyī al-Dīn Sām に与えたので両家の姻戚関係は二重になり、更に、バラークの息子スルターン・ルクヌッディーンの女がマフムードシャーの子サルグルシャーに、また、バラークの甥スルターン・クトゥブッディーンの四女クトルグ・テルケンがサームの息子ムイッズッディーン・マリクシャーに与えられた (Kirmāni, 30, 36) の⁹⁶、両家の結びつきは、一層強固になった。

クトゥブディーンの死後、マフムードシャーがアタベクの位に即き、アラウウッダウラ、及び父と同じクトゥブディーンの称号を帯び (Juvaini/Qazvini, II, 216/Boyle, II, 481; Tarikh-i Shāhi, 98) 六三七 (一二三七/八) 年に死亡するまで位にあった。

アーヤティー博士は、マフムードシャーはアーダム・ヤークートとの間に一女クルドチンをもうけたが、彼女は後にオゴタイの室に入ったと述べ、一方、ソトゥーデ博士は、アバガ・ハーンの妃になったと述べる。両博士の根拠とする史料は、『ヤズド新史』、『ジャーミウ・ムフィーディー』、ガッファアリーの『世界を飾る者の歴史』(Ghaffari/Minovi, 83) 等である。『ヤズド新史』(Katib, 71) には、

彼女に娘が生まれ、クルドチンと名付けられた。このクルドチンは、カーアーン・ハーンの妻となった。

とある。『ジャーミウ・ムフィーディー』の記述もほぼ同じ内容であるが、ガッファアリーだけは、夫の名を「アバガ・ハーン」と記している。しかし、モンゴル側史料には対応する記述はなく、これらより早い史料『ヤズド史』にも見えないので、事実とするには根拠薄弱である。

オゴタイとカークイーエ家との婚儀が事実であったなら、カークイーエ家の服属も当然一二三〇年代に行われたことになるが、モンゴル側史料もヤズド側史料もこの間の事情については述べていない。しかし、一二三一年のホラズム帝国消滅、それに続く隣国ケルマーンの対モンゴル服属に鑑みて、同家も三〇年代前半にモンゴル人に服属したと見てよい。

マフムードシャーの後継者は、ヤークート・テルケンの子アラウッダウラ・ルクスツデー・サルグルシャー (六三九―一二四一/二六六―一二六三/四年) であった。ジュヴァイニーは、一二四六年のクユクの即位式にフアルス、ケルマーン、イラーク・アジアミー、ルリスターンの君侯、貴顕の出席があったことを述べている

(Juvaini/Qazvini, I, 205; Boyle, I, 250) から、ヤズドの使者もこの中にあったであろうと考えられる。

サルグルシャーの叔伯父であるケルマーンのルクスッディーンはクユクの後援によって従兄弟クトゥブッディーンからスルターンの位を奪ったが、モンケの即位によって形勢が逆転したことを知り、六五〇(一二五二/三)年姉妹のアーダム・ヤークートとサルグルシャーを連れ、バグダードに走ろうとした(Juvaini/Qazvini, II, 216/Boyle, II, 481)。ケルマーンの場合は、スルターンの位を巡る一族内の争いが、皇帝位継承権を争うオゴタイ、ツルイ両ハーン家の確執に結びついたのであるが、ヤズドにも同様の事情があったのかもしれない。しかし、ルクスッディーンがカリフに保護を拒絶され、領国も失ったのに対し、サルグルシャーの場合は、『ヤズド新史』(Katib, p.22)に、

彼はカーアーンのもとに贈り物と使者を派遣した。カーアーンは彼に統治権の証書を書いて、服属を命じ、美服をつかわされた

とある。この記事に年次はないが、ペルシャ語同時代史料の通例では、クユクにはカーアーンの称号をつけないから、ここでカーアーンとあるのは、モンケである。

ついで、『世界征服者の歴史』(Juvaini/Qazvini, II, 256; Boyle, II, 250)には、

六五一(一二五三/四)年、アルグン・アカは、イラクとヤズドにナイマタイ Naimatai と我が父サーヒブ・ディーヴァーン Sahibi Divan を派遣した

とあるので、この年には、ヤズドの占領行政上の地位が確定したのである。この時ナイマタイとサーヒブ・ディーヴァーン・バハーウッディーン・ジュヴァイニーは、イラク・アジャミー州で、税糧負課のための人口調査を実施したのであるから、ヤズド地方は税額が決定され、実質的にアルグン・アカ Arghūn Aqā 治下のイラン総督府、阿母河行省に編入されたのである。『世界征服者の歴史』に、「イラクとヤズド」と並記されるのは、当時、ヤズドが

イラク・アジャミー（イスファハーン地方）に属するのか、ファールス地方に帰属するのかについて不明な点が残っていたからであろう。この後はヤズドはイラク・アジャミーの一部とされ、十四世紀中葉にムスタウフィー・ガズヴィーニの記した税務地理書では、イラク・アジャミー州の九トゥマーンの一つに数えられている。

また、フラグ西征軍の来着に際しては、一二五六年10/11月、イラン全国から食料及び駄馬の供出が命じられたが、ヤズドも指名をうけている（Juvaini/Boyle, II, 621; Qazvini, III, 112）。更に、モンゴル軍とダム・ガーン Damghān 地方のイスマイル派との戦闘に際しては、『世界征服者の歴史』には（Juvaini/Boyle, II, 626; Qazvini, III, 119）

（フラグは）ケルマーンとヤズドの軍勢にアブール・ニシン Abūhishin 及びマンスーリヤ Maṣūriya 及びいく

つかのこの地方の諸城を包囲するように命じ、彼らをモンゴル人によって増援した

とある。²⁰ 対イスマイル派戦に続く、バグダード攻撃に際して、『ムザッファル朝史』に、

ヤズドのアタベクはアブーバクル・ビン・ハージを三百騎とともにバグダードに派遣した。フラグ・ハーンはバグダードを征服した後、一軍をエジプト国境に派遣した。アブーバクル・ビン・ハージはその軍隊と共にあり、ハファージャ Khafāja アラブ人との戦闘で死亡した（Kutbi, 4）

とある。一二五八年のバグダード作戦、一二五九—六〇年のシリア遠征に、サルグルシャーは、メイボットの領主であったムザッファル家のアブーバクルを派遣したのである。シリアにおけるモンゴル軍は、一二六〇年エジプト・マムルーク朝のスルタン・クトゥーズの反撃を彼の手痛い打撃をうけ、モンゴル人、キリスト教徒、ムスリムからなる多数の将兵を失ったが、ヤズド分遣隊の損害も大きかったであろう。²¹

アタベク・サルグルシャーには姉妹テルケン・ハトゥンがあり、ファールスのサルグル家のアタベク・サアド Saʿad

に嫁していたが、彼女の夫は一二六〇年に、夫の位を継いで、アタベクの地位に即いた息子ムハンマドは、一二六二年死亡した。テルケンは、夫の従兄弟ムハンマドシャー、続いてサルジュークシャー（其々在位一二六二—六三、一二六三—六五年）をアタベクの位につけ、サルジュークシャーと再婚した。しかし一二六五年夫サルジュークシャーは突然テルケンを殺し、モンゴル人に対して公然と反乱を起した。サルグルシャーは、サルジュークシャーを討つために兵を出したが、戦闘中重傷を負い、その傷が原因で後に死亡した（Wasaf/Ayati, 104—110; Sotuda, II, 12—13）。

サルグルシャーの位を継いだのは子タギーシャー Tighi Shah（在位六七〇—一二七〇／一—六七三—一二七三／四年）であつた。タギーシャーの治世については、サルジュークシャーの反乱失敗後、テルケンの娘でムハンマドシャーの妻であつたビービー・サルガム Bibi Salgham が、タギーシャーの息子ユースフシャーに与えられこと以外に知るところがない。ユースフシャーは彼女にとって、『集史』、『ムジュマル・ファスィーヒー』には母方のおじの息子である²⁴と記すが、母方のおじの息子、従つて従兄弟であるのはタギーシャーである。この事件によつてアタベク・サアドの直系の子孫はビービー・サルガムと姉妹アビシュが残るのみであつたから、ファールスのアタベク家の私領の半分は、妻の財産という形で、ヤズドのアタベク家に伝えられたであらう。

タギーシャーには、アラウウッダウラ、ユースフシャーの二子があつたが、父の位を継いだのはアラウウッダウラであつた（在位六七〇—一二七〇／一—六七三—一二七三／四年）。彼の短い治世は、一二七三／四年に起つた大洪水によつて終つた。彼は洪水のもたらした災害を痛むあまり約一年後死亡したのである。（Sotuda, II, 13）。称号であるアラウウッダウラのみが伝えられており、名（イスマ）は、知られていない。

クトゥブッディーン・イスファフサルから、タギー・シャーの子アラウウッダウラに至る五代のアタベク達と

モンゴル人との関係について知られることは寡少である。この間ヤズド地方が、モンゴル人支配下の他の地方と同様の多種多様な税を課され、それを徴収するために往来する使者達の専横にも苦しまなければならなかったことは、容易に推測することができる。『ヤズド史』(Jafari, 131—133, 223)、『ヤズド新史』(Kātib, 89—91)にはイル・ハーンの宰相シャムスッディーン・ジュヴァイニーが、自己のヤズドにおける代理人で、ファールスの徴税受負人であったシャムスッディーン・ターズイグー [Tāzi] に命じて、ヤズド市内にダール・アル・シャファー Dār al-shafā 荘を建築させたところ (六六六—一二六七/八年完成)。これはシャムスッディーンが、ヤズドに不動産を獲得したことを意味するが、この土地は納税に耐えられずに売却した旧所有者から、入手したものであろう。

『ヤズド新史』、『ジャーミウ・ムフイーディ』等にある確認できない記事を除けば、ヤズドのアタベク家とチンギス・ハーン家との通婚を示す史料はない。しかし、アタベク家は、隣国ケルマーン・カラキタイ朝のクトルグ・ハーン家、ファールスのサルグル朝アタベク家とは、度重なる婚姻関係で結ばれており、彼らを通してイル・ハーン家とも通婚関係を有していた。当然ながら、これは、同家の命運を考える時、重要な意味を有していたであろう。

二、支配権の危機

アラウッディーンの死後、兄弟ルクスッディーン・ユースフシャーが、六七三(一二七四/五)年、後継者の地位についたが、大洪水後の経済再建に治世の大部分が費やれた (Sotuda, II, p.13)。¹³⁾『ヤズド新史』(Kātib, 24)には洪水のために破損した城 (hisar) を修繕した。しかし、極端に浪費家 (aiyāsh) であったので、ヤズドの歳入は、歳出を満たすことができなかった。ムハンマド・ムザッファルの父シャラフッディーン・ムザッファルは御前にあって、忠告したが、益がなかった。

とある。これ以後、ヤズドが被ることになる経済的、政治的大変動の原因は、ユースフシャーの財政方針にあったのかも知れない。

ヤズド地方の混乱とカークイエ家没落の原因となる事件は、突然年代記に記載される。『ヤズド史』(Ja'fari, p. 26)には、ヤズドの王国が父の後、ユースフシャー・イブン・アラウッダウラのもとに達すると、スルターン・ガザンの諸侯は、彼に対して貪欲な心をいだいて、献物を求めた。ユースフシャーは、これを無視し、同意しなかった。彼らはスルターンに、ヤズドを彼から取り上げるようにしむけ、二百人(の部下)を従えたダルーガのイスダル Isdar という名のものがさしむけられた。

とある。ヤズド近郊に到着したイスダルとユースフシャーの交渉は失敗し、イスダルは、ユースフシャーがオルドに赴くことを主張し続けたので、結局、ユースフシャーは、イスダルを急襲して、殺害した。これを知ったイル・ハーンは、アミール・ムハンマド・アブダチ Abdaji を三千人の兵士とともにヤズドに派遣した。ユースフシャーは(p. 27)イスダルの子女、郎党を捕えてヤズドを去り、スィースターンの方面に向った。彼らは、スルターンに従っていなかったからである。

また、『新ヤズド史』(Kaib, 74—75)によ

首都タブリーズでガザン・ハーンが帝王になると、アタベク・ユースフシャーは贈りものと使者を遣したが、彼の諸将にも贈物をするには気がつかなかった。ガザン・ハーン・イブン・アルグン・ハーンがタブリーズ、両イラクとホラーサーンを手に入れると、ガザン・ハーンの諸侯は、ユースフシャーに対して貪欲な心をいだき、アミール・イスーダルという名の者をヤズドに達遣し、アタベク・ユースフシャーは、ヤズドの三年分の税を支払うか、あるいはヤズドをイスーダルに引き渡して、自分は帝王のもとに赴けと命じた。

と書き出して、『ヤズド史』と同じ内容である。

一方、チムール朝期の年代記、ナタンズィイー *Nafsanzi* の『ムンタハブ・アッタワリーフ』(Aubin, 33) には、スルターン・ガザン・ハーンの時代には、諸地方の諸君侯のすべての者がオルドに顔を向けたが、アタベク・ユースフシャーはそれを理解しなかった。ヤズドの有力者達が彼の圧迫になすべくもなくなった時、自分達の心配をサーヒブ・アーデル・ホージャ・ラシードディーンに談った。彼はこの無法と圧迫の様子を帝王ガザン・ハーンに奏上し、述べた。「彼には服従の心がありません。諸地方のあらゆる知事、諸王が世界の帝王を祝福してオルドにまかり出るのに、彼は参りません」。そこでガザン・ハーンはヤズドのアタベクに知らせるための使者を遣わしたが、幾度使者を遣わしても彼は気がつかなかった。一人の使者が集まるまで、ためらった。

とある。このように、新旧ヤズド史、『ムンタハブ・アッタワリーフ』は、この事件がガザン・ハーンの治世に起ったとしている。ところが、イル・ハーン側の年代記では、『集史』「アルグン・ハーン紀」に (Рашид/Амсаде, III, 218

—9)

ヤズドのアタベク逮捕のために派遣されていたイスダルに、イスファハーンでアリーを処刑するように命じた。

彼はカーシャーンから部下を派遣し、アリーを逮捕させ、殺させた。彼が殺され、埋葬された場所は有名な巡礼地になった。イスダル自分も六〇日後ヤズドで殺された。

とある。このアリーは、シャムスッディーン・ジュヴァイニーの子バハーウッディーンの息子で、アルグン・ハーンのジュヴァイニー家弾圧の禍にあつて、六八八(一二八九/九〇)年カーシャーンで殺された。⁹⁴ 同族のマスード Mas'ūd とフアラジ Farajī がタブリーズで処刑されたのがラジャブ月三日(一二八九年七月二十三日)であるから、アリーの死もこのころであらう。すると、アタベク・ユースフシャーによって、イスダルが殺されたのは、一二

八九年九月ごろであらう。

また、『ワッサーフ史』にも (Wasṣaf/Ayatī, 151)

一方、ヤズドのアタベク・ユースフシャーは、アルグン・ハーンの(治世の)末年、反乱を起していた。イスダルは、行つて彼を捕え、彼に従う人々と共に(オルドに)もたらすようにとの勅命を受けた。イスダルは最初、敬意を払つて彼(との交渉)に望み、慣例どうりの贈り物を与えた。そして、拘束なしに彼を御前に連行することを望んだが、アタベクは同意しなかった。戦鬪が行なわれ、この戦いでアタベクは一族郎党ともども打死した。彼の持っていた物はすべて掠奪された。また、財物と商品とをもたすためにイル・ハーンから金を受け取っていた商人達を、裕福なユダヤ人の一団ともども殺害し、彼らの財物は国庫に運んだ。このころ、またノウルーズ・ベクはホラーサーンで攻撃を繰り返していた。婿であり親族である関係があつたので、財宝をもつて、彼のもとに向つた。ホラーサーンに着いたところ、ノウルーズ・ベクはスィースターン地方に行つて、ニクーダル軍を率いており、家にはいなかった。彼はノウルーズの跡を追つた。

とある。ここには、アタベクが死亡したとあるが、勿論討死したのはイスダルでなければならない。

このように、ヤズド地方史のガザン治世期説に対して、『集史』と『ワッサーフ史』は、ユースフシャーの反乱をアルグン・ハーンの治世年間のことであるとしている。また、『神の賜物』、『ムザッファル朝史』等のムザッファル朝史料も、アルグン・ハーンの時代のことであるとする。

一方、『ヤズド史』、『ワッサーフ史』にユースフシャーの逃亡先とあるスィースターンの地方史、『スィースターン史』六八八(一二八九/九〇)年の記事に (an, Bahār, 406)

ヤズドのアタベクの来着。彼は、大アタベク・クトゥブ・ミッラット・ワルディーン atabek mu'izzam Qutb al-

Millat wa al-Din—(イブン)・アタベク・アラウッダウラである。及び彼の一年間のスィースターン市居住また同年ホラーサーンのアミール・ノウルーズ Nowrūz のもとに赴くこと

とある。ユースフシャーにはルクヌッディーン¹のラカブがあるが、『神の賜物』(Yazdi, 34)では、ユースフシャーのラカブを「クトゥブッディーン」とも記しているから、ここにある人物は、まさにユースフシャーである。六八八年という年次が『集史』に記載する年次と一致すること、ユースフシャーが一年間スィースターンに留った後、ホラーサーンの將軍で、かつてのイラン総督アルグン・アカの息子ノウルーズのもとに向ったとする『ワッサーフ史』²にも見える記事から判断して、『スィースターン史』の記事は正確であり、従って反乱は、アルグン・ハーンの治世期一二八九年の夏から秋にかけて起ったことがわかるのである。

ユースフシャーがノウルーズのもとに至った理由については、『ワッサーフ史』に、「婿であり、親族」であつたとあるが、『集史』「ガザン・ハーン紀」に、バイドゥ・ハーン(在位一二九五年)は、(Pashud/Avizade, III, 294)

一万ディナールの金額の支払証書をヤズドの税に対して記し、ヤズドの町のアミールの地位(imārat)をノウルーズの息子で、アタベク・マフムードシャーの息子アタベク・アラウッディーン・ワダウラの娘スルターン・ハトゥンと関係のあつたスルタンシャーに与えた

とある。また同書別の箇所にも (Pashud/Avizade, III, 495)³

アミール・ノウルーズのハトゥンであつた、ヤズドのアタベクの姉妹の縁者スルターン

ともあるから、スルターンシャーは、ノウルーズとスルターン・ハトゥンとの間の子供であることが知られる。彼は、ユースフシャーの甥にあたり、ノウルーズがユースフシャーの婿であつたのである。ノウルーズは、一二八九年秋から、ガザン・ハーンに臣従する一二九五年までイル・ハーンに対する反乱を続けていたから、ユースフシャーは、ノ

ウルーズのもとに避難所を見つけることができたのである。ユースフシャーは、ノウルーズとともに、一年間スースタンに留った後、一緒にホラーサーンに向ったのである。

『ワッサーフ史』には、ユースフシャーは、「財物と商品とをもたらしのためにイル・ハーンから金を受け取っていた商人」、すなわち、オルターク商人の財物を掠奪したとするが、その詳細は、『ムンタハブ・タワーリーウ』に、(Aubin, 33)、ユースフシャーは反乱を決意すると、

その日に宴をもうけた。ヤズドの有力者達、貴顕達 *majmū'i akābir wa sudūr* 各人から幾何かの金を借りることを求め、借用証を書いた。かなりの金額を集めると、翌日、債権者達を集め、無理に借用証を取り上げた。とある。ユースフシャーは可能な限りの金品をかき集めた後、ヤズドを去った。

ヤズド地方史とイル・ハーン側史料は、スィースターン到着後のユースフシャーの行動、及び反乱の帰着するところについて述べてないが、ただ、『ムンテハブ・アッタワーリフ』(Auban, p. 33) には、先に引用した記事に続いて、ただちに後から使者が遣され、彼は捕縛されオルドに連行され、裁判を受けた。結局彼はこの危機からのがれ、生を全うし、勅命によって国々の諸王がシャームに向った時まで、オルドに留まった。アタベク・ユースフシャーは、非常に困窮していて、武器がなかったので、シャームとミスルに向うことができなかった。ヤズドに行き、用意を備える許可を求めた。運命はこのようになった。彼に悪い眼病が現れ、この眼病は(勅命)違反の原因になった。スルターン・ガザンがシャームから帰還した後、この違反の理由で、彼をオルドで処刑した。

とある。またソトウデ博士の引用するところの『ムイイズル・アンサーブ』の記事もこれと同様である (Soruda, II, 15—16)。

まず、ユースフシャーの逮捕のガザーンのホラーサーン総督時代のこととも、即位後のこととも記されていない

が、政情から判断して、即位前のことであり、ノウルーズがガザンに帰順した前後であろう。裁判におけるユースフシャーの無罪判決も、女婿で、保護者たるノウルーズのガザンに対する影響力を無視して考えることはできない。最終的にユースフシャー刑死の原因となったガザンのシリア遠征は、第一次が、一二九九年秋に開始され、ガザンは翌春帰国したから、刑死も一三〇〇年であろう。この時ノウルーズも既に没落し、この世になかった。

反乱の経過については、いくつかのことが明らかになったが、原因については、イル・ハーン側資料には、述べられていないし、ヤズド地方史が、ハーンの側近にユースフシャーの敵がいたとするのも、アルグーン・ハーンの時代のことであるか、それともガザン・ハーンの時代のことであるか、判断する根拠がない。しかし、その背景にあった政治情況は、第一にユースフシャーとアフトマド・テクダル・ハーンとの関係である。アフマドに対するアルグーン・ハーンの反乱に際して、土着領侯は、アフマドに従ったが、『集史』『アルグーン・ハーン紀』に (Pamir/Avnsaric, III, 200) 。

イスファハーンの人々は、天変の一大事に際して、彼（シャムスッディーン・ジュヴァイニー）を、タブナイ T.b.nay という名のイスファハーンのシャフネが、アルグーン・ハーンの支持者で、けしてアフマドの前に行かなかったという理由で、捕え、イスファハーン市に拘禁したヤズドのアタベクとともに捕えようとしたとあり、ユースフシャーは、アフマド・ハーン支持者として積極的に行動していたのである。この内乱が、アルグーンの勝利に終ると、同じくアフマド側であった小ルリスターンのアタベク・ユースフシャーとケルマーンのスルターン・ジャラールッディーン・ソユルガトミシュは、相次いで、アルグーンのもとに入朝し、領土を安堵された。しかしヤズドのユースフシャーは入朝を行わなかったのである。しかし、内乱処理後の問題として解すると一二八九年は、アルグーン即位の一二八四年夏とは、期間があきすぎる。

ユースフシャー反乱の第二の背影は、一二八九年一月の宰相ブカの処刑である。ブカは、アルグン廃位の陰謀を画ったとして処刑され、同時に彼の共謀者のみならず友人、家族、彼に近かったイラン人官僚、土着領侯が刑死したのである。アミール・ノウルーズ反乱の理由も、この事件に連座することを恐れたからであったが、ブカの姻族であったグルジア王デイミトリはこのために処刑されたのであるから、ノウルーズの岳父ユースフシャーにも恐れる理由があった。

『ヤズド史』(前述)によると、イスダルの殉職の後、アミール・ムハンマドが兵三千を率いてヤズドに進んだのであるが、六九〇年ジュマード第一月(一二九一年五月)、ルリスターンのアタベク・ユースフシャーがイスファハーンを占領した時、ここのシャフネはタガチャル・ノヤン Tagachar Nūyān の婿^ムであり、(Wassāf, Āyatī, 150)、『ワッサーフ史』には、

このムハンマドはゲイハトゥ・ハーンの即位の始めよりイスファハーンの知事職に以命されたが、しかし、ひき続き王子ガザンと関係があり、奉仕することを明かにした (Wassāf, Āyatī, 179)

とあるから、一二八九年には、まだイスファハーンのシャフネではなかった。しかし、ユースフシャーの家臣でメイポットの領主アミール・ムザッファルッディーン Muẓaffar al-Dīn は、スィースターンで主人と離反し、アミール・イスダルの家族を連れてヤズドに戻ったが、そこから更にアルグン・ハーンのオルドに赴いた。途中、やはりオルドに向っていたアミール・ムハンマド・フシー Khushī (或いは Jushī) と呼ばれる大アミール umarā-i 'azām の一人の知己を得、ハーンに謁見することができた (Mawāhib-i iḥāhī, 39)。また、ムハンマド・イダチは、ガザンの支持者であったという理由で、バイドゥ・ハーンの末年(一二九五年)殺害されている (Wassāf, Āyatī, 180)。従って、アミール・ムハンマド・イダチのヤズドにおける事跡は、すべて一二八九年とそれに続く年のものである。さて、

『ヤズド新史』は、ユースフシャー亡命後のヤズドの情況について次のように述べる。(Jafari, 76)

さて、アミール・ムハンマドが、軍勢とともに、イスファハーンからヤズド近くに到着するとヤズドの聖裔、法官、住民は、旗とコーランの章句を書いた板を掲げて、歓迎のため城外に出て、慈悲を求め、今回の件に関して我々に罪はありません、彼と敵対することは不可能でした。ユースフシャーの行った行為は、我々にはいかんともしかねました。至高なる神は、「重荷ヲ負フ者ハ、他ノ者の重荷ヲ負ハナイ」と言つて、弁解した。アミール・ムハンマドはヤズドの人々を許し、安んじた。そしてブルグダル Bulghdar と言う名のダルーガを定めた。

ヤズドの住民は、この時平和裏に開城降服したのであるから、『ワッサーフ史』に、ルリスターンの反乱鎮圧のため (Wasṣāf/Ayatī, 152)

トゥラダイ Tulaḍāy が到着する前に、ユースフシャーの家臣の一人タフティー Tati という者が城壁を固め、不正の手を平げていたので、一軍がヤズド開放のために派遣された。軍勢は三日間ヤズドの外郊に宿営し、戦闘を行ったが、町を陥すことはできなかった。結局、困難であるという理由で、そこ(ヤズド近郊)から糧食を徴発し、知事達、將軍達と合流し、こぞってスール・イ・スィールザーンの方に向つた

とあるのは、当然ムハンマド・イダチの遠征とは別で、それより以前のことである。市近郊で、食糧の強制徴発とそれに伴う混乱があったものの、市内では武力占領にともなう殺戮、掠奪、破壊はなかったようである。

さて、ユースフシャー不在期のヤズド統治について、フセインクリー・ソトゥーデ氏は、この時よりヤズドの徴税権は、イル・ハーン中央政府に移り、更に六九三(一二九三/四)年には、ケルマーンの統治者バードシャー・ハトゥン Pādshāh khātūn が夫であったゲイハトゥ・ハーンにヤズドの統治権を求めて許され、彼女は、ノスラト・マリ

ク Nusrat Malik をヤズドに派遣した。また、六九四（一二九四／五）年にはアミール・ノウルーズの息子スルターン・シャーに、年額一千ディナールで請負に出されたとする (Sotada, II, 16)。しかし、先ず、『集史』「ガザーン・ハーン記」(Паши, Авираде, III, 460)

六九一（一二九一／九二）年、ヤズド州ではオマルシャー・サマルカンディーの息子アリー・ホージャが知事 (hākim) であった

とある。すなわち、ユースフシャーの逃亡後、徴税権は、請負か、事実上の官職買売によって、出自不明のアリー・ホージャに与えられた。ラシードディーン主張するところによると、ヤズド地方はアリー・ホージャの横領行為によって混乱と疲弊の極に達したのである。アリー・ホージャに続いた、バードシャー・ハトゥンと実質上の統治者ノスラト・マリクの支配期には、ヤズドは、ケルマーン、シャバーンカラと単一の支配者の下に統一されたので、イラク・アジャミー州からは分離されたのである。

六九四（一二九五）年ゲイハトゥ・ハーンは、バイドゥ・ハーンに打倒され、バードシャー・ハトゥンのヤズド支配権も失われた。『集史』「ガザン・ハーン紀」(Паши/Авираде, III, 294) には、バイドゥは、当時ガザンに帰順していたノウルーズを逮捕し利によって籠絡させようとしたが、ノウルーズは、

ガザンを（逮捕して）送り届けることを約束したので、帰還を許された。彼には多くの恩恵が与えられたが、ヤズドのアミールの地位 (imārat) が、バイドゥの側から、彼の息子スルタンシャーに託され、一万ディナールの額が、彼のためにヤズドに宛てて記された

とある。ヤズドのアミールの地位は、ノウルーズとアラウッダウラの娘との間に生まれたスルタン・シャーに与えられたのである。金額一万ディナールは、異本では一千ディナールとなっている。ソトゥーデ博士は、この金額でヤ

ズドの徴税権が請負に出された、とするが、『心魂の喜び』『地理編』では、ヤズド郡からあがる国家収入は、二五万一千ディナールで、メイボット郡からでさえ、二万二百ディナールに達していた (Mustaufi, Dabirisyāqi, 84) のであるから、一万ディナールのような少額で徴税が請負われるとは考え難い。一万ディナールの下賜が与えられ、そのための支払証書 (barāt) がヤズドに宛てて、振り出されたのである。

また、『集史』「ガザン・ハーン紀」には、(Pamur/Avhang, III, 459)

ヤズドのイマームの一人が、市中に一軒の家を持っていたが、六九五 (一二五九/六) 年、彼の偉大なる統治の時に、ノウルーズの子スルターン・シャーと彼の母親は、そこに使者を派遣した。彼らは四ヶ月そこに居たが (彼らが去った) 後、家の中には、何一つ残されなかった。

とある。スルターン・シャーは、彼自身は少年であつたであろうが、母親が代つてオルドから使者を派遣して、支払書を現金化しようとしたのである。貴人の遣す使者が掠奪行為を働いたことは、ラシードッディーンが、『集史』「ガザン・ハーン紀」第三部で、繰り返し述べるところだが、旧領主の一族の使者にして、しかもヤズドの宗教指導者の家宅でこのような掠奪が行なわれたのであるから、同じく、『ガザン・ハーン紀』(Pamur/Avhang, III, 564) に、

イスダル Yisūdar の子タガイ Taghāy が、ヤズドのシャフネから解任され、彼の部下が、帰任した時、予防処置がとられたことを、この祝福された書の頁は、伝える。彼らの属人は、七百余軒 (の民家) に住んでいた。

とあるのは、シャフネの部下が帰任の際、民家で掠奪行為を働くことに關してだが、タガイが、ユースフシャーに殺されたイスダルの子であればなおさらであらう。

先の記事で、ガザン・ハーンの宰相ラシードッディーンのヤズドに対する配慮の浅くないことを知る。既に引用した『ムンタハブ・アッタワリーフ』(Nafanji/Aubin, 33) には、ユースフシャーの圧迫に苦しんだヤズドの有力者が

苦境をラシードッディーンに訴え、ラシードは、それをガザン・ハーンに上奏した、とある。反乱自体は、アルグン・ハーンの時代に起ったのであり、この時は、ラシードは関与していないが、ガザン・ハーンの初期にヤズドにおいて不正な徴税、使者やシャフネによる暴虐が行われていたのは事実であるから、これについてヤズドの有力者がラシードッディーンの保護をもとめたことは、あったであろう。ナタンズィーは、(Nafanji/Aubin, 34)

ヤズド地方はガザン・ハーンの治世の初めから、スルターン・ムハンマド・ウルジェイト、スルターン・アブーサイド、彼ノ上に神ノ恵アレ、まで、ホージャ・ラシードッディーン、ホージャ・ギヤースッディーン・ムハンマド・ワズィールの保護の翼の中で安全であった

と述べる。ただ、ラシードッディーンが、ヤズド有力者の上奏を入れて、ガザンにユースフシャーの叛意を伝えたとする『ムンタハブ・アッタワリーフ』の記事が、事実でないと考えられるのは、『ラシード書簡集』第二三番に、彼の息子アブドルラティーフ Abd al-Latif は、マリク・アラウッダウラの娘テルケン・ハトゥン、すなわちユースフシャーの姪あるいは孫娘を娶っているとあるからである。アブドルラティーフは、ホラーサーン太守時代のアブーサイドのサーヒブ・ディワーンであった (Wasāfī/Āyati, 353)。

シャネフ殺害の暴挙を行ったユースフシャーが何故罰を免れ得たかについて、直接述べる資料はないが、次の二つの事情を考えることができる。第一に、彼の妻ビービー・サルガム・テルケンは、フラグの王子モンケテムルの妻アバーシュ・ハトゥンの姉妹で、彼らの娘でケルマーンのスルタン・ジャラールッディーンに娶したクルドチンの伯叔母にあたり、『ヤズド新史』には (Kātib, 71)

ケルマーンとヤズドのスルターン達は、彼女(クルドチン)の保護のもとにあった

とある。イル・ハーン国では、国事犯の処遇にあって、ハーンの諸妃の発言力が強大であったことは、多くの実例を

挙げることができよう。第二は、ユースフシャーの婿ノウルーズは、一二九七年政敵の陰謀によって殺害されるまで、ガザン・ハーン第一の部将であつて、ハーンに対し強力な影響力を及ぼしていたことである。このどちらがより有効に働いたにせよ、カークイエ家は、幾重にも結ばれた婚姻により、イル・ハーン一族や有力な部将、高官と親族関係を持っていたのである。

三、ムザッファル家の台頭とカークイエ朝の消滅

ソトゥーデ博士は、ユースフシャーの後、息子ハージーシャー *Hajishāh* がアタベクの位についたので、アタベクの名によるヤズド統治は、七一八（一三一八／九）年ムザッファル家のアミール・ムバーレズッディン *Mubārez al-Dīn*・ムハンマドがそれを掌握するまで続いた、と述べる (*loc. cit.*, II, 16—17)。*『ムンテハブ・アッタワーリフ』* (*Aubin*, 34) によるべし。

（彼には）アラウッダウラという名の息子がいて、彼は死ぬまでヤズドにいた。

『神の賜物』 には、ある時、アミール・ケイホスロー・イブン・マフムード・インジャー *amir Keikhosrow b. Mahmūd Injū* がヤズドに来て、 (*Yazdi*, 53—8)

アタベク・ハージーシャー・イブン・ユースフシャーと友宜を深めた

とあるから、ハージャーシャーのラカブは、同家に特有なアラウッダウラであつたことが知られる。

ムザッファル朝諸史料によると、ハージーシャーの支配権の終焉、すなわちムザッファル家のアミール・ムバーレズッディンのヤズド支配権掌握は、七一八（一三一八／九）年であるとするが、その事情は次のとおりである。アミール・ケイホスローのヤズド滞在中、アタベクが不法にもアミールの副官を殺したので、アミールはイル・ハー

往古より確固として玉座にあった王家は愚かにも潰え、長く繁栄の証人であつた一族は、この世代で絶えた
とあるが、具体的な記述はない。

『ムンタハブ・アッタワリーフ』(Natanzi, 34)に

彼の息子サルグルシャーも父の後、また不名誉なことで死亡した

とあり、ハージャーには、子サルグルシャーがあつたが、『ヤズド史』(Jafari, 81—7)、『ヤズド新史』(Karb, 123—9)には、アタベクと聖裔であるアミール・ルクヌッディーン、アミール・シャムスッディーンとの抗争について、次のように述べている。アタベクは、ルクヌッディーンが七一五(一二一五/六)年に建てたルクヌーヤ学院のために、祖先マフムードシャーの建てたマフムードシャーヒー学院の建物が見劣りするようになったことについて、恨みを懷いていた。折しも、ヤズドに富んだキリスト教徒商人が来て住みつき、市内に庭園と屋敷を建てた。ある時盗賊(アイヤールーン)がこの商人を襲撃して、財物を奪つた。この事件はルクヌッディーンの指金によるものであるとマザーレム法廷に告訴する者があつたので、アタベクは彼に杖刑を命じ、さらに投獄した。息子シャムスディーンは、首都に赴き、宰相ギヤースッディーンの保護を求めた。宰相はシャムスディーンを自分の代理(ナリーブ)に任命し、ヤズドの大法官、ワクフ管理官の地位を与え、父親を救わせた。この父子は、『ムジュマル・ファスィーボー』(Khwāfī, III, 43) بني هاشم *maula al-murtidā al-a'zam al-akram sayyid Rukn al-Millat wa al-Din Muḥammad b. al-murtidā al-a'zam sayyid Qawām al-Millat wa al-Din Muḥammad b. Ni'zām al-Huse'ini al-Yazdi Tūfī*

と、息子 *maulana wa shahib 'azam seyyed Shams al-Millat wa al-Din Muhammad* で、没年は各々七三二(一三三一／二)と翌七三三年である。この事件が七一五年以降、七二八(一三二八／九)年から、七三二年までに起ったとすると、両年代記にあるように、アタベクをユースフシャーとするのは、誤りで、このアタベクは、ハージーシャーの子サルグルシャーでなければならない。ここで明らかであるのは、ヤズドの行政権はサルグルシャーの手中にあったことである。

さらにアブーサイド朝にアタベクの権力が存続していたことを示す記事が『ヤズド史』(Ja'fari, 32—3)にある。

七〇七年スルターンは、ヤズドをサイエド・アダド *'Adad* に与え、徴税し、それをオルドにもたらすように命じた。サイエド・アダドがヤズド市の近くに来た時スルターン・アブーサイドの計報が届いた。ムハンマド・ムザッファルはメイボッドからヤズドに来て、ヤズドを占領し、部下を城門に配置した。

アブーサイドの死亡した年の事件であるから、年次は七〇七年ではなく、『ヤズド新史』(Kaib, 83) にもあるように七三七(一三三六／七)年である(アブーサイドは、一三三五年一月三〇日没)。これについて、『ムザッファル朝史』(Kaib, 8) に年次を示さない記事があり、アダドをムルテザー・アアザム・セイエド・アダドディーーン・ヤズディーとし、ファールスのシャフネであったと記す。彼に対して、

ヤズドのハーキムは、アミール・ムバーレズディーーンと一致して、彼を押えようと計画したのである。ムザッファル家の本拠はメイボッドにあり、ヤズドにはハーキムがいたが、明らかに、この地位はムザッファル家の属官ではない。

さらにこの事件の後、アブーサイドが派遣した知事を殺し、ファールスの支配権を確立したインジュール家がヤズドに遠征すると、ムバーレズディーーンは、我が子の、

シャラフッディーン・シャーフ・ムザッファルを無数の歩騎の軍と共に右翼に派遣し、またシャーフ・ムハンマドシャー・イブン・大アタベク・アラウウッダウラと他の一団を左翼に派遣した (Yazdi, 96—7)

のである。すなわちヤズドには、カークイーエ朝のアラーウッダウラの子ムハンマドシャーがいたのである。アラウウッダウラを称したことが明らかな最後のアタベクは、ハージーシャーであるから、ムハンマドシャーは、ハージーシャーの子であろう。そして恐らく、『ヤズド新史』に「ヤズドのハーキム」とあるのも、ムハンマドシャーであろう。彼は、既に「アタベク」の称号は持たず、単に、独立の君主の諸侯、王子の用いた「シャー」を称したのである。『ムンタハブ・アッタワリーフ』(Nafanzi, 34) にサルグルシャーの子孫について

彼の子供達の幾人かは今も残っており、他の貧しい農民同様に農耕に従事している

と述べる。ナタンズイーの同時代(一五世紀)には、カークイーエ家の子孫は、一切の政治権力から遠ざかったのであるが、この時にはムザッファル朝も既にチムールのために滅ぼされていた。

結 語

一、カークイーエ家のヤズド支配は、従来の説である七一八年までではなく、少くとも七三七年までは存続した。

二、同家は、ケルマーンのクトルグ・スルタン家、ファールスのサルグル家との緊密な婚姻を通じてイル・ハーン家とも親族関係にあり、アルグン・アカ家、ラシード家とも通婚関係にあった。

三、一三世紀末以降、ヤズド地方では、アミール、及び大土地所有者としてムザッファル家、トゥーフイー家が台頭するが、これについては、別稿で論じなければならない。

註

- (1) Ademec L. W., *Historical Gazetteer of Iran*, vol. 1, Graz, 1976, pp. 688—696° 大野盛雄『ペルシアの歴史——むらの実態調査』東京大学出版会、一九七一年、一一—一二頁。
- (2) Le Strange, G., *The Lands of the Eastern Caliphate*, Cambridge, 1905; Ḥamd allāh Mustaufi, *Nuzhat al-Qulub*, Bikaushish Muḥammad Dabir Siyāqi, Tehrān, 1336, p. 83—84.
- (3) Ḥusainqlī Sūtūda, *Tarih-i Āl-i Muẓaffar*, vol. 2, pp. 1—9: cf. Qāẓi Aḥmad Ghaffārī Qazwīnī, *Tārikh-i Jahān Ārā*, Bi-himmat Muḥtabī Minnovi, Tehrān, 1343, pp. 81—84.
- (4) Muʿin al-Dīn b. Jalāl al-Dīn Muḥammad Yazdī, *Mawahib-i ilāhi dar Tārikh-i Āl-i Muẓaffar*, Bā-taṣṣih Saʿid Nafīṣi, Majlad avval, Tehrān, 1326.
- (5) Muḥammad Kutbī, *Tārikh-i Āl-i Muẓaffar*, Bi-ihitām ‘Abd al-Musain Navā’i, Tehrān, 1335.
- (6) Jaʿfar b. Muḥammad b. Ḥasan Jaʿfārī, *Tārikh-i Yazd*, Bi-kaushish Īraj Afshār, Tehrān, 1338.
- (7) Aḥmad b. Ḥusain b. ‘Alī Kātib, *Tārikh-i Jadid-i Yazd*, Bi-Kaushish Īraj Afshār, Tehran, 1345.
- (8) ‘Alā’ al-Dīn ‘Aṭmalik Juwainī, *Tārikh-i Jahān-Gushā*, Ed. Muḥammad Qazwīnī, I—III, Leyden and London, 1912, 1916, 1937; J. A. Boyle, *The History of the World-Conqueror by ‘Ala ad-din ‘Ata-Malik Juwaini*, 2 vols., Manchester, 1958.
- (9) Рашид-ад-дин, *Джами ат-Таварих*, т. III, сост. А. А. Ализаде, Баку, 1957.
- (10) Shihāb al-Dīn Waṣṣāf, *Tārikh-i Wassāf*, Bombay, 1296, Pep., Teh. 1338° ʿAbd al-Muḥammad Āyātī, *Tahrir-i Tārikh-i Waṣṣāf*, Tehrān, 1346 採用。
- (11) Ḥamd Allāh Qazwīnī, *Tārikh-i Gozīda*, Bi-Kaushishi ‘Abd al-Ḥusain Navā’i, 1961.
- (12) 著者、十四世紀前半に執筆されたと思われるムハンマド・アンサーの『ムハンマド・アンサー (Muḥammad Shabāngārī, *Majmaʿ al-Ansāb*)』(これは有名なムハンマド朝の系図とは別巻である。A. M. Мугинов, Исторический Труд Мухаммада Шебāн-гāра’и, *Труды Института Востоковедения*, No. IX, 1954, стр. 220—240 参照) 及びムハンマド朝に執筆されたムハンマドの『ムハンマド・アンサー・ムハンマド・ムハンマド (Muʿin al-Dīn Naṭanzī, *Muntakhab al-Tawārīkh Muʿini*, Bi-taṣṣih Zhān Aubān, Tehrān, 1336) にも本姓の記述が見える。
- (13) この分野に関する研究は多くなり、著者通称として ‘Abd al-Ḥusain Āyātī, *Tārikh-i Yazd*, Yazd, 1318° ヤズド地方全体の歴史地理として Īraj Afshār, *Yādgārḥā-i Yazd*, 3 vols, Tehrān, 1340, 42 などあり、カータイ家のメヘンダール領主として

て出発したムザッファル朝の歴史』 Husainquli Sütüda, *Tarih-i Ali-Muzaffar*, 2 vols., Tehran, 1246 がある。アタベク朝支配期を扱った専論では, İraj Afshar, "Rashid al-Din va Yazd", *Majma'i Athar-i Rashid al-Din Fa'l Allāh Hamadani*, I, Tehrān, 1335, pp. 25—36; J. Aubin, "Le patronage culturel en Iran sous les Ilkhans", *Le Monde iranien et l'Islam*, t. III, 1975, pp. 107—118 等がある。

- (14) Shihab al-Din Nasawi, *Sirati Jalāl al-Din Minkbirni*, Bi-Tashih Mujibi Minovi, Tehrān, 1344 45 (シラ暦七世紀の「ムンクビルニ」) Шихаб ад-дин Мухаммад ан-Насави, *Жизнеописание Султана Джалала ад-Дина Минкбурни*, Перевод З. М. Буянова, Баку, 1973 44, マラヤー語原典からの訳である。

- (15) Ann, *Tarih-i Shahi*, bi-ithimām, Muḥammad Bāstani-Pūrizi, Tehrān, 2335, p. 98.

- (16) このマリヤム・テルケンとは、バラークが当のクトルグテルケンとの間にもうけた娘であるから (Wassaf/Ayati, 175) 、彼女とサームとの結婚は、この事件のあった六二五 (一二二七/八) 年より、十数年後のこととなる。そうであると、サームの没年も、ソトゥード博士 (Sotūda, II, 11, 12) が採る『シャミニウ・ムフイーディー Jamī' Muftidī』の六二三 (一二二三/四) 年ではなく、『ヤズド史』の六四三 (一二四五/六) 年が正確であらう。

- (17) Muḥid Mustawfī Buḥārī, *Jamī' Muftidī*, Bi-kausheshi İraj Afshar, vol. I, Tehrān, 1342, p. 89; Qaz'i Ahmad Chaffāri, *Tarih-i Jahān-Arā*, Bi-hemmati M. Minovi, Tehrān, 1342, p. 83. しかし、そのソトゥード博士が掲げる Nāsir al-Din Munshi Kimāni, *Sinī al-Ulā*, Bi-tashih 'Abbās Iqbāl, Tehrān, 1327, p. 24 には、該当する記事はない。しかし、マフムードシャーに「テルケン・ハトゥン以外の娘がいて、彼女がオゴタイか或いはアバガの側室 (qumā) になった可能性を否定するものではない。」

- (18) 『スィムトル・ウラー』の著者ナースィルディーンは、「この史書の筆者の父、ウムダットル・ムルク・ホージャ・ムンテハブディーン・ヤズディ、Umdat al-Mulk Kihwāja Muntakhab al-Din Yazdi は、アタベク・マフムードシャーの息子達であるヤズドのアタベク達ロクヌッドンヤ・ワッディーン・アラウウッダウラとムザッファアルドゥンヤ・ワッディーン・ムハンマドの争いのためヤズドからのがれていた (miyāna kardā būd) とある (Kirmāni, 32) 。しかしサルグルシャーに兄弟ムハンマドがあり、彼もまたアタベクと称したことは、他の史料には見えない。

- (19) 故ボイル教授は、アラウウッダウラをサルグルシャーでなく、その子と間違っているようである。

- (20) cf. 'Ali-Asghar Dāmghāni, *Sad darvaza*, Tehrān, 1352, pp. 50—53.

- (21) ハファージヤ族は、四五〇 (一〇五八/九) 年、タイイ族によって、イラクからシリアに追われていく (F. Krenkow, [A. A. Dixon], "Khatā'at", E. L. New ed. vol. 4, pp. 412—3) 。

- ㉒ Rashid al-Dīn Tabīb, *The Successors of Genghis khan*, Tr. J. A. Bole, p. 307; Faṣīḥ Aḥmad Khwāfi, *Mujmal Faṣīḥi*, Bi-Taṣḥīḥ Maḥ. Farakh, 1340, Mashhad, vol. 2, 232)
- ㉓ 彼の父タギーンシャーがこの称号を持っていたかは、明らかでない。
- ㉔ F. G. Brown, “Introduction”, to Juvaini/Qazwini, vol. 1, XLVIII; 『イシムアル・フアスアイーヒ』(Khwāfi, II, 263) には六七九(一二八九／九)年とある。
- ㉕ lbdachi, Ṭdachiと史料によって異なるが、後者であらう。後に見える Khushi, Jūshi も後者の誤記であらう。
- ㉖ 地方官の不正による地方経済の混乱、特にヤスト地方における事情については、本田実信「ガザン・カンの税制改革」『北海道大学文学部紀要』第一〇号、八九—一二七頁。
- ㉗ アタドについては、以下を参照。Sotūda, II, 298; Bāfegī, Jāmi-i Mufīdī, 152—3; Daulatshāh, *Memoirs of the Poets*, Ed., E. G. Brown, London & Leiden, 1902, 294—6; Yazdī, *Mawāhib-i ilāhi* 92—93; Aubin, loc. cit., 110.